

図書案内

原子力とわたしたちの未来
韓国キリスト教の視点から～
『基督教思想』編
訳・神山美奈子 李相勁 李相勲 洪伊杓
かんよう出版

この本は「基督教思想」2012年3月号の特集「原子力とわたしたちの未来」7編の他に韓国基督教教会協議会の講演文、韓国女性神学2011年夏号の原子力特集原稿、2012年4月シンポジウム「核なき世のための韓国キリスト者連帯」創立記念シンポジウム発表文、韓国キリスト教界からの「脱核宣言文」など合わせて20篇、20人の執筆者からなっています。

日本と韓国は原子力問題において生死を共にする「一つの運命共同体」であり、共に手をとりあって生きていく方法を模索し、その意味においてこの本が孤軍奮闘している日本の市民団体とキリスト教界の脱原発運動の力になればとのことです。

[付録]として「韓国キリスト教界の原発に関する宣言文」がまとめられていて、五つの声明書や宣言文などがあります。その中には「東アジア脱原発・自然エネルギー311人宣言、2012年3月11日」もあり、韓国・日本・それぞれ100人ずつと中国・その他の国111人が名前を連ねていて、なじみのある人の名前がたくさん出てきます。

この本の出版までの経緯は序文で、以下のように述べられています。

『「基督教思想』は、韓国の代表的なキリスト教連合機関である「大韓基督教書会」から1957年に創刊された月刊誌です。この雑誌は1960年代の土着化神学論争と1970~1980年代の民衆神学論争が生まれた舞台でもありました。しかし、韓国の基督教の良心と知性を代表するこの雑誌がこれまで「核（原子力）」の問題を一度も特集テーマとして扱わなかったという事実は福島原発の事故一年を迎える大きな反省と省察を促しました。（以下略）』さらに、

韓国でも2012年2月に釜山近くの古里原発で突然の停電で非常作動機までも止まり、冷却水循環が中断するという事故が起きました。冷却水の温度が58度まであがり、さらに長引いたならば核燃料棒が溶けてしまうという状況に陥りましたが、幸いにも12分ほどで電力供給が復旧して事故を免れたという事実がありました。事故の知らせも一ヵ月後であり、韓国社会に大きな衝撃を与えました。この古里原発は2007年にはすでに30年の寿命を迎えたにもかかわらず寿命延長決定が強行され、韓国はこれ以上原子力問題に関して無関心のままではいられない深刻な危機の時代を直視しなければならない状況だといいます。このような観点から韓国の代表的なキリスト教雑誌である「基督教思想」は、福島原発事故一年を迎えた2012年3月号の特集を「原子力とわたしたちの未来」と決めたとのことです。

韓国の原発は1978年から本格稼動して2011年12月までに古里・新古里（5基）、月城（4基）、蔚珍（6基）、靈光（6基）、合わせて21基の原子炉があり、なお4基が建設中です。韓国全体の発電容量における原発の割合は現在30%で、このままでいけば、2020年には44パーセント、2030年には59パーセントとなる公算です。

韓国では1990年から2010年の20年間に電気の消費量が4倍になり、一人当たりの電気消費量は日本や中部ヨーロッパに比べて最も多いという現実です。

また、日本同様、原発の建っている地域は小さい村で政治力も弱く、賛否にわかれ地域社会がずたずたになっているにもかかわらず、電力の38%は首都圏で消費されているのです。

そこには送電塔建設という深刻な問題が起こってきます。海岸近くに建てられる原発は都会から離れた片田舎です。そこから首都圏に送られる電気は送電塔が必要なため、景観が壊される上、生活の場である畑や田などに建設されるのです。そのため、あちこちで反対運動が起きますが、その一つ、密陽では孤児となった兄弟が70歳を超えて初

めて手にいれた土地に送電塔が建設されることになり、反対運動を始めました。送電塔のために土地の値段が一挙に 3 分の 1 になり、7 年もの間反対運動をしましたが、たちのき業者を動員しての決行で非力な老人は排斥されてしまい、無念さのために焼身自殺を図りました。この事件は、ひとつの地域の暮らしを豊かにするために別の地域の暮らしを破壊されるといった暴力を止めなければならない、老人の犠牲は誤った政府のエネルギー政策と公権力の濫用によるものであるということでき大きな問題になりました。こんな中で 2012 年 1 月、ソウル市は、「全市民が 13% ずつ電力の消費を減らせば原発一基を減らすことができて核から安全な世の中を生きるようになる」と宣言し、「エネルギー節約と生産で原発一基を減らすこと」と「市民参与型新再生エネルギー生産」に関する市政計画を発表しました。

こういう状況の中でキリスト教はどう考え、キリスト者に何ができるか。この本の執筆者は牧師、神学者、物理学者、環境センター代表、エネルギー正義行動代表、理学博士、歴史神学者などです。いずれも核（原発）とキリスト教は両立しないという考え方の下に書かれています。

ある執筆者は「神が創られた一つしかない地球を放射性物質で汚染することは、人間の貪欲によって生命を破壊することである。原子力エネルギーの中毒となっている私たちに、素朴な暮らし、分かちあう暮らし、配慮する暮らし、節制する暮らしの仕方を提示するのは、宗教の役割でもある。私たちが日本の前轍を踏まないでおこうとするなら、今から原発廃棄について論議し、エネルギー転換のために努力を傾けなければならない。その過程においては宗教の役割、キリスト教の役割がとても大きい」と主張しています。

またある人は、核とキリスト教は両立し得ないという中で「人間が C P I という世界初の人工原子炉をシカゴ大学に作ったときから<創造主の領域>に入るようになったという。宇宙では核融合反応が起こり、その星では生命の一つも生きられ

ない。生物がいる世界では核の火は絶対に燃やしてはならない<天の火>である。この<天の火>をぬすみ、地球上でおこしたことが人間の傲慢である。日本の高木仁三郎は<天の火>を理解し、核を人間の傲慢であると批判した。」とあります。また、ある著者は、旧約聖書にててくるエデンの園の中央にある「善悪を知る木の実をとってたべてはならない」ということにふれ、今日の善悪を知る木の実とは人間の生命を複製すること、自然にはない元素(プルトニウム)を作り出すこと、そして核兵器である。人間にはすべてのことができるがしてはならないことがある、それが聖書の神が人間に伝えたい言葉であるといわれています。

また、具体的な憂慮についても多くのことにつれられています。

「すでに起こってしまった福島の事故は全世界を震撼させ、今も放射性物質は出続けている。1986 年のチェルノブイリの事故はウクライナ、ベラルーシ、ロシアを越えてヨーロッパ各地に放射能を広げた。スウェーデンの鹿、イギリスの羊たちは集団埋葬処分され、ヨーロッパ各国の牛乳が廃棄処分になった。時間が経つにつれ、人間にも甲状腺被害、白血病などが 20 万人を超える、甲状腺がんを発病した子が 2000 人に達する、今も半径 30 キロ以内は暮らせないと述べられています。今や、原発事故は韓国でも他人事ではないのです。古里原発は 2000 年に入ってから 200 回に近い故障があり、蔚珍原発では蒸気発生器細管の破断事故が起きたとのこと。

そんな中、ソウルにある「広東教会」、「ジピヨン教会」「青坡教会」、「香隣教会」、が太陽光発電を取り入れ、他に自家発電をしている教会が五つも紹介されています。核（原子力）に頼らず、自然エネルギーを取り入れるという迅速な実践はうらやましいものがあります。

4 人の訳者はすべて牧師さんと神学者であり、わかりやすい日本語に訳されていて、丁寧な凡例と注を見ながら読み進めていくと韓国のキリスト者の熱情が伝わってくるようです。 信長たか子